
魔術師の午後

深月人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師の午後

【Nコード】

N6777X

【作者名】

深月人

【あらすじ】

魔術師を狩り、世界を整える事を良しとした魔術師、御霊詠。
魔術師の存在を知り、異端とするシリアルキラー、軌条真。
二人は魔術師を狩るために今夜も動き出す。

プロローグ

ほんの少し、ほんの少しだけ世界は壊れている。

こんな何の変哲もない生活に疑問を感じた人も少なくはないと思う。

刺激というものが存在しない日々。しかし刺激というものは本当は存在している。

だが、知らない……知らされていないのだ。そして、そういう事の大抵は知らなくとも良い物であり、知ることです今の穏やかな日常を破綻させてしまうこともあり得る。そして誰も知らないことは嘘になる。

吸血鬼はいる。雪男は実在した……そんな妄言を誰が信じるだろうか？ 幻想はあくまで幻想。

だから知識あるものは口に出そうとはしない。

たとえば、事実であったとしても、その知識は幻想が当たり前となっている者達だけが共有する。

それでいい、それで世界は回り続ける。

x

x

夜、ある街の路地にて。

「またですか……もうこれで三件目ですよ」

そう言いながら一人の若い警官はブルーシートを捲り、中の死体を見る。

「うえ、またこの殺し方ですか、まったく趣味の悪い」

そしてブルーシートをゆっくりとかけ直す。

この猟奇殺人事件が発生して、早くも三ヶ月の時間が過ぎようとしている。

犯人の意図は全くもつての不明……被害者の肢体は全て根元から切断されており、毎回、被害者を中心に四つの柱になるように立てられている。

そんな事件だが、犯人の手がかりは一切残されておらず、手掛かりはなし。犯人を逮捕するなど雲を掴むような話だと言われている。現に今回も何も見つからない。

「どうしたもんですかね……」

若い警官はブルーシートをぼうつと眺めながら呟いた。

「どうしようもねえさ……わかるのは死亡時刻くれえだしな。この街も随分物騒になったもんだ……」

それを聞いていた隣の警官が答える。

この事件を解決するのはもはや人間のなせる所ではないのだろう。神が人に裁きを下したような諦め、解決しようがない、ただただその事実を受け止めるだけの状態。

この事件は仕方ない、被害者、そして親族には辛いものかも知れないが仕方ないのだ。震災と同じような感覚とも言える。

そんな事件の現場がある男はビルの上から眺めていた。パーカーのフードを深く被り、少しダボついたズボンの腰元には相棒とも言えるコンバットナイフが隠されている。

遙か下に群がる人をゴミでも見るような目で見つめる、この男には警察が嗅ぎまわっているのが不快なのだ。それからブルーシートのかけられた場所を見て、男はつつい口元が緩んだ。

あの被害者の最期がこの男の脳内にフラッシュバックしたのだ。

最期の表情、身体は動かさず、意識だけが残り、自分の腕を切られる痛みを味わい、泣き叫ぶ顔。

この男にはその顔が素晴らしく愉快に感じられた。

「くつく……間抜けな警察が何をしても無駄なんだよ。あんな蟲にも満たないような奴は死んで当然、次は一ヶ月後だ」

そう言い、男は闇へと消えた。

朝、目が覚めた魔術師の右目に映ったのは一つの情報だった。

「 始末した」

勿論、こんな簡易な文章の送り主は奴しかないだろう。軌条真まじょうまことだ。

奴は生まれた時からの人殺しだったのだろう。今は魔術師を殺し、そして、その行動を楽しんでいる。

この魔術師を殺す行動に対して同じ魔術師であるこの男は疑問を持ったことはない。触らぬ神に祟りなしというわけだ。

右目に写っている報告を消すと、魔術師の男は時計に目をやった。「ん、まだ六時にもなっていないのか。身体を起こすには少し早いか」そう言いつつ男はベッドから立ち上がると、少し離れた冷蔵庫へと向かった。冷蔵庫から取り出したのはいつものアイスコーヒー。寝癖でボサボサになっている髪を手櫛で直そうとしながら、椅子

に座りアイスコーヒーを机に置く。

そしてテレビを点けるとニュースを確認する。内容はやはり朝から街で殺人が起こったということが放送されていた。これで軌条への依頼は成功に終わったということが確実となった。

「 やっぱり成功してたか……流石だな」

男がそう言った瞬間だった。

「 成功だったことはもう確認できたかな？ わかりやすく死体で遊んでやったんだけどさ……って聞いてんのか？ 御霊詠ごりょうよみ」

唐突に軌条の声が部屋に響く。そんなことも御霊詠と呼ばれたこの魔術師の男にしてはもう慣れたことである。

御霊は窓際に腰かける軌条の顔を一瞥し、もう一度アイスコーヒーを眺めると、口を開いた。

「 よくやった、とまでは言えないが充分に依頼内容をクリアしてる。

今回の報酬は何がいいんだ？ お前の欲しいものを用意する」

「そうだな、碧ノ眼でいい」

碧ノ眼^{アオノメ}……御霊の特異な魔術式を瞳に宿したものは碧ノ眼と呼ばれる宝石に変わる。そのことを知っている人間……魔術師、化物も含め、当の本人である御霊、そしてこの軌条しか知る者はいない。

「それは不可能だつて事はお前もわかつてるだろう？ 無駄な質問をしてどうする」

そう、不可能^{ふかのう}なのだ。碧ノ眼は生きている人間、それも魔術の心得のある者……さらにその中でもごく一部にしか付与することはできない。

それは他人の魔術式を体内に収めるということは死に等しいものであるからだ。碧ノ眼は一時的な能力の向上を促すような魔術ではないからこそ、常人には不可能なのだ。

「そんな事は分かかってるんだよ、でもそれをなんとかするのがアンタみたいな変わった人間の仕事だろうが。あんまり俺を馬鹿にしないうほうがいいぜ、報酬も用意できないようなクライアントは俺にとってはゴミ以下だからな」

はつきりと声色が変わったのがわかる。しかし御霊にとっては、不可能を可能にするのが魔術の常だと考えている素人の話など聞くに値しない。

と言つても、御霊は優れた魔術師からは遠い存在。この異常な身体能力を有している軌条と相對したとして勝ち目は微塵もない。所詮、欠陥だらけの魔術では一人の人間を葬る事もできないわけだ。

「そこまで言うなら軌条、お前の眼に魔術式を施してやる。ただし碧ノ眼の能力は危険だ、少しずつ碧ノ眼に近付けていってやる。途中で投げ出すもよしだ、少しずつ、ほんの少しずつ魔術を施していく。これで文句はないだろ」

たとえ少しの魔術式だとしても激痛は激痛。勿論全てを一気に施したときは死に至るわけだが。少しだけ、それでも三、四日は寝たきりになるだろう。

「へー、何の心変わりかまでは読めないけど、もらえるってんなら素直にいただくよ」

そう言い軌条は窓際から部屋の中へと入った。

「最初に言っておくが、軌条、他人の魔術式を体内に入れるのはお前が想像してるような簡単なものじゃない。推測だが、激痛で気絶するだろう。それでも構わないなら、俺の右目を見るといい」

御霊はそう言うと、右目の瞳を碧く輝かせた。

勿論のことだったが、そんな簡単な脅し文句で引くような軌条ではない。

軌条は何を質問するわけでもなく、御霊の碧ノ眼を見つめた。

軌条がキラキラと輝く御霊の碧く輝く瞳を見つめた時だった、脳を直接揺らされたような錯覚を覚え軌条は胃の中にある物を御霊の部屋に吐き出した。

「ぐ、あ……」

激痛で叫ぶなんてのはまだ温いと言える。

激痛で声が出せなくなり、肺に空気が入ってこようとしない。まるで空気が軌条の体に入るのを拒んでいるようにだ。

軌条は苦しさのあまりに床に倒れこむ。既に御霊の耳には軌条の叫び声ともならない呻き声は聞こえてきていない。

そして、御霊は苦しむ殺人鬼から視線を外すと、アイスコーヒ―を口に運んだ。

御霊はコーヒーを口にすると、軌条が開けた窓を閉めた。

この能力、碧ノ眼の力を応用すれば瞳を相手に見せるだけで人を殺すことが出来る……そんな便利な力ではないことは言うまでもないだろう。

勿論、代償がある。

御霊が自身を欠陥品と呼ぶのはこの代償が割りに合わないからである。

理由は簡単……代償は御霊の体からランダムに選択され、そして碧ノ眼へと吸収される。つまり碧ノ眼が失った分の魔力は肉体から補わなければならないということだ。そして使う力が大きければ大きいほど代償も伴って大きくなる。

人を殺すほどの魔力を使用するとすると勿論その分代償が大きくなる。

軌条は御霊の目的には必要な貴重な人材……大きな代償を払い、失うということは御霊にとってマイナスでしかない。

「まあ、これで二時間は動けはしないだろう……。他人の魔力は毒だ、もうこれ以上は軌条、お前の体が持たないぞ」

そう言った時だ、早速代償を払う時がきた。碧ノ眼が御霊の意思とは勝手に輝きだし、御霊の目の前に魔術陣を描き出す。

今回使った魔力ほんの少し、持って行かれるものも大したことはないだろう。

「毎回のことながらいきなりだな……」

唐突に魔術陣は消え去った、これは碧ノ眼が代償を奪い終えたという知らせでもある。

代償として脚の肉を少し削られた。御霊の予想通り、大したものではない。

魔術陣が消えた後だ、次は碧ノ眼が何かを感知したように疼きだす。

「ん、この反応は……随分と早い対応だな。流石に何度も嘔み付かれてたんじゃ慣れてもくるか」

碧ノ眼が魔力を感知したのだ。

御霊が住み留まるこの街にはあらゆる場所に魔術師を感知する仕掛けが施されている。

今回碧ノ眼が反応したのは、その仕掛けが魔術師という異端を感じたからだ。

「にしてもタイミングが悪いな。まるで軌条が気絶したのが向こうにバレてたみたいじゃないか」

そんなことは絶対にありえないが、実際のところタイミングとしては最悪。

今回この街に来ている魔術師は協会からの派遣に間違いはない、協会の魔術師たちにすれば協会の意志に反抗してくる御霊たちこそが異端なわけだ。異端を狩り、円滑な活動を望んでいる。

「早速面倒なことになったな……」

そう言いながらも、コーヒーを一口。

「痛つてえ……」

床から声が聴こえる。

まさかと思いつながらも御霊は床に倒れ込んでいるはずの軌条を見ると、既に軌条は起き上がってきていた。

「お前……身体を動かせられるのか？」

御霊は驚きを隠せない顔で軌条に質問する。

それもそうだが、今まで軌条に試したことはないにしても、他の人間や魔術師には幾度と無く使用している。

だが、これまでに一度としてこんな短時間で意識を保ち、身体を起こした者はいない。

「まだ気持ち悪いけど、碧ノ眼もたいしたことないじゃん。退魔つてのにここまで感謝したことはないね」

そう言い軌条はシャツの下から首にかけていたネックレスを取り出した。

「これさ、いつだったかの魔術師のおっさんが自慢してるのを奪ったのよ。普段の奴らは鈍くて魔術とやらを直撃することはないから役に立たないけど、まさかこんなところで活躍してくれるとはね」

軌条はそう言いながら笑うが、御霊はやはり驚きを隠せなかった。碧ノ眼はそこから手に入るような装飾品に施された退魔などで緩和されるような力ではない。極端な話、神の力が宿っているほどの力がなければ不可能な事でもある。それほどに碧ノ眼は人にとって脅威なのだ。

よって、この碧ノ眼の力を短時間で押さえ込んだのは軌条本人と
いうことだろう。

「本当に恐ろしい奴だ……だがこれは俺にとってはプラスになる。軌条、早速だが仕事の依頼がある。今現在、俺たちがこの間から潰しにかかっている組織からの刺客が二人ほどこの街に侵入してきている。そいつらの始末、および情報収集を頼みたい。報酬はいつも通りなんでも……だ」

御霊はコーヒーの入ったカップを机の上に置き、軌条の顔を見た。彼……いや彼女はいつも通りの整った顔の口元は微かに歪ませ、舌なめずりをした後、気付いたときには部屋から風のように消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6777x/>

魔術師の午後

2011年12月15日04時45分発行